

岡山夜間中は四月から表町に移ります。また、夏には全国夜間中の大会が開催され、岡山城、岡山県立美術館、オリエント美術館一带カルチャーゾーンの江戸時代の古地図などを調べる活動も予定されているようです。そこで、明治時代に、このカルチャーゾーン、天神山一带に一大テーマパークがあったことを思い出しました。これは、私が後楽館高校



亜公園写真

に勤務していたときに偶然知ったことです。後楽館高校は当時、岡山県立美術館とオリエント美術館に挟まれた位置にあり、その場所は現在、RSKの新社屋となっています。

まず、天神という名前の由来から。天神といえば、天神様、菅原道真公ですね。その当時、岡山、天神あたりは、旭川の河口で、瀬戸内海といってもよいようなところでした。のちに、岡山、石山、天神山と呼ばれる三つの丘は、島だったようです。そして、天神山の由来は、天満宮すなわち天神社があったからと岡山の歴史のサイトには書いてあります。それは今、岡山神社に合祀されています。太宰府に流される菅原道真の一行の舟が休憩をした場所との言い伝えもあり、それで天満天神が祀られたとの説もあるようです。時代は移り、明治中期、明治の学校・役場等の建設ラッシュで財をなした材木商、片山儀太郎が登場します。彼は岡山銀行・岡山木材会社社長、岡山貯蓄銀行取締役等を歴任、岡山市天神町に菅原道真をテーマにした日本初のテーマパークといってもよい公園を開園しました。道真は園全体のテーマで、各施設には菅松楼、天神座、天神茶屋といった道真にちなむ名称が付けられました。その公園は、岡山が誇る「後楽園」に次ぐ公園として、「亜公園」と命名されました。中心に東京・浅草の「凌雲閣（十二階）」をまねて建てた八角形の高さ33mの七階楼「集成閣」がそびえ、周辺を劇場や旅館、遊技場や飲食店劇場、ビリヤード場、射的場、写真館などが囲む斬新な総合娯楽施設でした。遙か瀬戸内海までも見渡せる景観と山陽鉄道の開通も相まって京阪神からも多くの来園者が集まり、片山は2年で元が取れたと豪語したという話です。亜公園と片山氏宅との間に、私設電話がとりつけられたのが、岡山におけるモシモシの第一声とのことです。（明治25年3月1日）『岡山巷談』（小橋基夫、岡山新聞社、1961年）しかし、日清戦争後の株の暴落で、片山儀太郎が借財を作ったために、この公園はわずか5年ほどで閉園となりました。天神山「甚九郎稲荷」には、「亜公園集成閣」跡を示す碑が残されています。甚九郎稲荷の巨岩は亜公園



から移ってき、中央にへこみがあり、学問の

神である菅原道真から、硯をモチーフに **甚九郎稲荷「亜公園集成閣」跡碑**

したものです。また、「日露戦争」勝利後の1905（明治38）年、岡山では図書館建設の気運が起こり、「亜公園」のシンボルタワーで「集成閣」の1～3階部分を改修し「戦捷（せんしょう）記念」の名を冠した図書館としました。この図書館は幾度かの改称、移転を経て後 戦後に「岡山県立図書館」

戦捷（せんしょう）記念県立図書館 へと発展していきます。